

血の病証と治療

神奈川県・平馬医院 平馬直樹

血の概念と機能

血は、気・津液とともに重要な人体の基礎物質である。気がエネルギー源であるのにたいして、血は「血となり、肉となり、骨となる」という言葉があるように、体液や人体組織にも転化する人体の物質的な基礎となる栄養物質である。

血は、血脈中を流れる特殊な気である「営気」と、津液から造られる。さらにそのおおもとは、飲食物から取り込んだ水穀中の精微物質であり、血の生成は飲食物の消化・吸収を担当する脾と胃の働きによっている（『靈枢』決氣篇「中焦受気取汁，変化而赤，是謂血」）。

気・血・津液は五臓六腑の間を澁みなく流動し、これらの物質の絶え間ない供給によって、臓腑の機能が維持される。これらの物質が休みなく、阻滯することなく循環することによって人体の機能が保たれる。

血は脈中をめぐり、全身の臓腑・組織器官に流注する。その主な作用は、全身を栄養し、滋潤することである。『難経』二十二難に「血主濡之」とある。「血は人体を潤す作用がある」という意である。

また、『素問』五臓生成論篇には「肝受血而能視，足受血而能歩，掌受血而能握，指受血而能撰」とあり、目などの感覚や手足の運動の機能も血の作用に依拠していることを説明している。

また、陰陽の観点からみれば、気が陽に属して、「動」の性質をもつものに対して、血は陰に属して、人体の機能を安定した静謐な状態に保とうとする寧静作用をもつ。

血の病証

1. 血虚証

血の機能不足による病証が血虚証である。血の栄養・滋潤・寧静機能の低下や失調として表れる。

血虚証の成因は、以下のものがある。

1つは、脾胃虚弱による血の産生不足と肝腎不足による精血不足である。脾胃の虚弱では、飲食物の精微物質を取り込み、血を産生する働きが低下する。また、肝は血を、腎は精を貯える臓である。「精血同源」というように、精または血が不足すると、精から血、または血から精に転化してお互いに補い合う関係にある。

肝の蔵血機能、腎の精を封蔵する機能が不足すると、血を補充できなくなる。

次に血の消耗過多で、これには出血後（出産や月経過多、不正出血も含む）の補充不足や精神情緒の失調・慢性病による消耗などが含まれる。また肝の蔵血機能障害により、組織器官が充分に血の供給を受けられなくなり生ずる場合もある。

その症候はめまい・耳鳴・顔面は蒼白で艶がない・眼がかすむ・爪が固くカサカサになりあるいは変形する。手足が痺れたり知覚鈍麻をきたし、筋肉がピクピク痙攣する。不眠・夢が多い、心悸不安、健忘。女性では月経は出血量が少なく色が淡い、希発月経や閉経となることもある。舌質淡苔白・脈弦細などである。

血と臓腑の関係を整理すると、次の3臓との関係が重要である。心は血脈を主り、血の全身への運行を担当している。肝には蔵血機能があり、全身の血流量を調節し、失血を予防している。また、脾は血の生産の場である。したがって、血の病証を治すには、心・肝・脾の調理が必要なが多い。

血虚証の合併症としてよくみられるのは、気血両虚証と肝腎両虚証である。脾胃虚弱による血の産生不足に起因する血虚証では、脾胃の運化機能が衰え、気の産生も低下していることがよくある。また、出血・慢性病などで血が消耗する場合も、血とともに気も脱失・消耗するので、気血両虚になりやすい。

慢性の消耗性疾患や精神情緒の失調では、腎精と肝血の両方を消耗することがよくあり、肝腎両虚証を生ずる。

血虚証の治療 —— 補血法 ——

血虚証にたいしては、補血法を用いる。

1) 補血法の用薬

当帰・熟地黄・白芍・丹参・阿膠・何首烏・鶏血藤などの補血薬を中心にして、活血化瘀の川芎・紅花・益母草・桃仁、補気健脾の茯苓・白朮・黄耆・炙甘草などを配合する。

補血薬のエース格は当帰と熟地黄である。

当帰はセリ科の植物（ミヤマトウキなど）の根で、独特な香りを持ち、味は辛甘である。補血の作用にすぐれ、肝血を養い、血虚証の諸症状を改善するほか、とくに月経の調節作用にすぐれる。婦人の聖薬と呼ばれる由縁である。また辛味があることから血のめぐりを促し、瘀血を解消する活血化瘀作用も併せもち、手足を温めたり痛みを止める作用にもすぐれる。

熟地黄はゴマノハグサ科のジオウの根を酒で蒸して修治したもの。加工することによって甘みが強くなり精血を補益する力にすぐれる。腎精と肝血を補うどちらにもエース級の働きをする。肝腎両虚証にはぴったりの薬物。

2) 補血法の主要な方剤

補血の基本方剤である四物湯とその類方、気血両虚の帰脾湯・当帰補血湯・十全大補湯、婦人病に汎用される当帰芍薬散を紹介する。

四物湯（『和剤局方』）

【組成】 熟地黄・当帰・白芍・川芎

【効能】 補血調血

【主治】 血虚証

補血和血の基本方剤である。

血虚証は、失血による血液の損失、脾虚と肝腎不足による血液の化生不足、情志内傷による心血の損耗などによって起こる。血の不足により血脈は空虚となり、血の全身への滋潤栄養作用が失調する。また、精神思惟活動も安寧を失う。

全身の血虚は、肝の蔵血機能の失調を来しやすい。全身の血虚の所見に加えて、肝血が潤養している眼・爪・筋などがその潤いと栄養を失い、月経の失調を来しやすい。

その症候は、めまい・耳鳴・健忘・顔面は蒼白で艶がない・眼がかすむ・爪が固くカサカサになりあるいは変形する。手足が痺れたり知覚鈍麻を来し、筋肉がピクピク痙攣する。月経は出血量が少なく色が薄い、希発月経や閉経となることもある。舌質淡苔白・脈弦細。

方中の熟地黄は甘微温で、滋陰補血の効にすぐれ主薬である。当帰は辛甘温で補血養肝・和血調経の働きにすぐれ、臣薬である。白芍は酸苦微寒で、養血柔肝の効があり、川芎は辛温で活血理気の効がある。いずれも血分に作用する薬であり、熟地黄の補に、川芎の散を配し、川芎の発散に芍薬の収斂を配したバランスにすぐれた配合となっている。

〈四物湯の類方1〉 芎帰膠艾湯（『金匱要略』）

【組成】 川芎・阿膠・艾葉・当帰・芍薬・地黄・炙甘草

【効能】 補血止血・調経安胎

【主治】 婦人の衝任虚損による崩漏

衝脈と任脈は、月経現象と密接な関係をもつ。その機能失調により、不正出血・月経過多などの月経異常が起こる。本方は養血止血法により、肝の蔵血機能を回復して、月経の安定をはかる。

本方は、四物湯の加味方で、方中の阿膠は養血止血、艾葉は温経止血の効があり、ともに主薬。残りの4味は四物湯であり、補血調経・活血和血して、膠・艾の薬効を高めている。

〈四物湯の類方2〉 当帰飲子（『濟生方』）

【組成】 当帰・芍薬・地黄・川芎・何首烏・蒺藜子・荊芥・防風・黄耆・甘草

【効能】 養血潤燥・祛風止痒

【主治】 血虚生風の痒み

血虚により、血の寧静作用と、気を制御する働きが低下すると体内に風を生じやすくなる（血虚生風）。たとえば、生じた風邪がふるえを起こせばパーキンソン症状などを来す。本方は、風が生じて痒みを生じたものに用いる。老人性皮膚搔痒症などによくみられる。

四物湯の養血に黄耆・何首烏で益気養血を強化，蒺藜子・荊芥・防風で祛風止痒の配合。

帰脾湯（『濟生方』）

【組成】 人参・黄耆・白朮・茯神・木香・炙甘草・当帰・竜眼・酸棗仁・遠志

【効能】 益気補血・健脾養心

【主治】 (1) 心脾両虚証

(2) 脾不統血証

心脾両虚証とは、心血虚+脾気虚の病態で、思い悩むなどの精神情緒の偏りなどが原因となり、心の蔵神機能と脾の気血を化生する機能が失調することによって生じる。動悸・不眠・健忘・疲労倦怠・食欲不振・舌質淡苔薄白・脈細弱などの症候がみられる。

次に、脾不統血証とは、脾気が不足して、全身にめぐる血脈を引き締め、血液が漏れ出さないように働いている統血機能が失調し、心が血脈をコントロールする機能も失調して、血液が皮下や体外に漏出する出血を来す状態である。

主として下血と不正性器出血（崩漏）の場合を、脾不統血という。気虚による出血でも、その他の出血は、「気不摂血」と呼ぶことが多い。しかし、血尿・皮下出血・鼻出血などの場合も脾不統血という場合もある。これらの出血に加えて、同時に脾虚の症候がみられる。いずれも帰脾湯の適応症である。

黄耆と人参は補脾益気，竜眼肉と当帰は養血安神で、この組み合わせが気血双補・補心脾となっている。白朮の健脾と木香の理気醒脾は黄耆・人参を助け、茯神と酸棗仁は養心安神で竜眼肉・当帰を助けている。遠志は寧心安神で動悸・不眠に伴う煩躁不安を解除する。炙甘草は諸薬を調和するばかりでなく、四君子湯中の益気調中と炙甘草湯中の通利血脈の効能を兼ねている。

脾不統血証に用いるのであれば、阿膠・艾葉などの養血止血の薬物を加えると、より効果的である。

当帰補血湯（『内外傷弁惑論』）

【組成】 黄耆・当帰

【効能】 補気生血

【主治】 労倦内傷・気弱血虚証

疲労の蓄積などによる体力の消耗によって元気が不足し、血の機能もまた衰え、陰分の不足を伴うものに用いる。血虚発熱や皮膚の化膿創が潰爛したのち、癒合しないもの（床ずれも含む）にも応用される。

黄耆を多く（15～30g）用いる。黄耆で脾肺に気を充足させ、生血の源を鼓舞して、養血和營の当帰を少量用いて血の内生を促す。

十全大補湯（『和剂局方』）

【組成】 人参・黄耆・白朮・茯苓・熟地黄・当帰・芍薬・川芎・肉桂・炙甘草

【効能】 温補気血

【主治】 気血両虚証

『太平惠民和剂局方』諸虚門を出典とする。その条文は「男子婦人，諸虚不足，五劳七傷，飲食進まず，久病虚損，時に潮熱を發し，氣骨脊を攻め，拘急疼痛，夜夢遺精，面色萎黄，脚膝力なく，一切の病後，氣旧の如からず，憂愁思傷，氣血を傷動し，喘嗽中滿，脾腎の氣弱く，五心煩悶するを治す，並びに皆之を治す。この薬性温にして熱せず，平補にして効あり，氣を養い，神を育し，脾を醒まし，渴を止め，正を順らし，邪をさく，脾胃を温暖にして，その効具に述ぶべからず」とある。

浅田宗伯の『勿誤藥室方函口訣』には「此方，局方の主治によれば，気血虚すと云うが八物湯の目的にて，寒と云うが黄耆・肉桂の目的なり。又下元氣衰と云うも肉桂の目的なり。又黄耆を用ふるは人參に力を併せて汗，盜汗を止め，表氣を固むるの意なり，肉桂を用ゆると，九味の薬を引導して夫々の病む処に達するの意なり。何れも此意を合点して諸病に運用すべし」という解説があり，応用の参考になる。消耗性疾患に広く応用され，たとえば外科手術の術後は，手術の侵襲によって気血両虚の状態になっていることが多く，術後の体力の回復に本方がいればしばしば応用される。十全大補湯の類方には八珍湯・人參養榮湯・大防風湯などがある。

当歸芍藥散（『金匱要略』）

【組成】 当歸・芍藥・川芎・白朮・茯苓・沢瀉**【効能】** 養血健脾・緩急止痛・安胎**【主治】** 肝血不足・脾虚湿滯証

原典の『金匱要略』では，妊娠中の腹痛と婦人腹中諸疾痛に用いる処方である。肝血不足のため，肝氣を制御できず，脾虚湿滯に乗じて，肝氣が横逆し，肝脾不和を来して腹痛するものが適応である。

歴代，肝血不足・脾虚湿滯・肝脾不和をキーワードに，婦人の月経痛や月経不順・帯下・むくみ・妊娠時の体調不良などに広く応用されてきた。

補血柔肝の当歸と芍藥が処方の中で，この2味から方剤名が採られている。川芎は，活血ばかりでなく，疏肝理氣の働きもあり，止痛には重要な役割を担っている。白朮・茯苓で健脾，沢瀉・茯苓で淡滲利湿して，脾虚湿滯を改善する。

2. 血瘀証と瘀血

血瘀と瘀血の概念

瘀血とその前提となる病態の血瘀の概念と成因，その病証について，解説する。瘀血は人体を構成する重要な基本物質である血が変質して，身体に有害な病理産物となったもので，瘀血は古くは淤血とも表記された。「淤」の文字は，水底にたまったおり，どろを意味し，ふさぐ，ふさがるという意味ももつ。瘀血とは，淀んでおりのように変質した血を表す。古典医書では，悪血・留血（『内経』），蓄血（『金匱要略』），積血（『諸病源候論』）などとも表記されている。

瘀血の成因には，外傷や出血，外邪の作用など局所的な原因もあるが，瘀血の

生じる前提に、多くは血のめぐりが悪くなった血瘀という病理状態が存在する。

血の概念と機能については、すでに血虚証の項で述べているが、血は、気・津液とともに重要な人体の基本物質であり、気・血・津液は五臓六腑の間を流動し、これらの物質の絶え間ない供給によって臓腑の機能は維持される。これらの物質が休みなく、阻滞することなく循環することによって人体の機能が保たれ、生命活動が営まれる。血は脈中をめぐり、全身の臓腑・組織器官に流注する。その主な作用は、前述のように全身を栄養し、滋潤することで、また陰陽の観点からみれば、血は陰に属して、人体の機能を安定した静謐な状態に保とうとする寧静作用をもち、陽の特性をもつ気が暴れるのを制御する。

血の運行が、何らかの原因によって失調し、病的な血行不暢状態となった病証を血瘀という。血液の流行が緩慢となり、鬱滞して通暢しなくなった病理状態である。

血瘀の原因には、気滞・気虚・寒凝・血熱・外傷などが挙げられる。

血の循環は、気の推动作用に依頼し、血は気に随って脈中をめぐるので、気が滞れば血も停滞し、気虚により気の推动作用が不足すると、やはり血の停滞をまねく。寒邪や内寒が血に作用すると、寒は「凝滞」という性質をもつので、血流が停滞する。『靈枢』癰疽篇に「寒邪が経脈中に客す(居座る)れば、血が泣って(滞って)通じない」という病理メカニズムが示されている。一方、血熱では一般に血の妄動が起こるが(血熱妄行)、熱により血が煮詰められると、血が粘稠になり、逆に流れにくくなり血瘀を生ずることがある。外傷は血絡を損傷して、脈中から逸脱した離経の血が瘀血となり、血流も阻滞する。

これらの成因により血瘀が生ずると、停滞した血は生理的機能を失い、病的な状態に変質しやすく、こうして生じた病理産物が瘀血である。

臓腑の観点からみれば、血の流行は心と肝の機能と密接な関連がある。心は血脈を主り、血の運行の動力源である。一方、肝には蔵血作用があり、全身の血流量をコントロールしている。また、肝の疏泄作用によって血は全身をスムーズに周行することができる。したがって、心・肝の機能失調は血瘀の原因になる。また脾の統血機能の失調により出血が起こると、血脈から漏れだした離経の血が生理状態を保てなくなり瘀血が生じる。

血瘀と瘀血には、全身性のものと局所的なものがあり、局所的なものは、各臓腑・組織・器官のいずれの部位にも生じ得る。

瘀血の症候

瘀血による主な症候は、第1に疼痛である。瘀血の前提となる血瘀の状態が痛みの原因となる。中国医学では痛みの原因を気血の流行不暢によるものとする。「通則不痛、不通則痛」という格言がある。気または血、あるいはその両方の通行不調が痛みの原因になるという考え方である。したがって、痛みは気滞を主因とするものと血瘀を主因とするものに大別される。

血瘀を背景とする瘀血の痛みの特徴は、持続性で、部位は固定性であり、圧痛が顕著であること、刺すような痛みや拍動性の痛みであることなど。典型的には金属バットで殴られて、青あざができた部位の痛みを思い浮かべるとわかりやすい。

これにたいして気のめぐりが滞った気滞による痛みは、おなかにガスがたまっ

て痛むのを想像するとよいが、時間的にも部位的にも変動・移動しやすく、痛んだり和らんだり、痛む場所もあちこち動く。痛む場所の脹・悶・痞を伴うのも痛み方の特徴。このように痛みの特徴から血瘀の痛みか気滞の痛みかを鑑別するが、臨床の場では二つが合併した気滞血瘀の痛みもよくみられる。

第2に、皮膚・粘膜・舌の色調の変化で、暗紫色になり黒ずんだ瘀点や瘀斑が生じる。顔色もくすんで艶がなく、皮膚のくぼんだりくびれた部位に色素沈着がみられる。唇の色が悪く、くすんだり青みがかっている。舌診で舌の色調が暗く青紫を帯びる。瘀斑という黒ずんだ斑が表れていることもある。

第3は、瘀血が慢性化すると、血が栄養・滋潤の生理機能を発揮できなくなり、皮膚が乾燥し粗くなり、顔色は艶がなくなり、毛髪（「血の餘」と称される）は傷んでかさつく。爪が硬くなったりすじが入ったり、変形することもある。局所の血虚症状といえる。

第4に、瘀血が長く留滞すると、凝り固まって腫塊を形成する。しこりのできる原因は、気滞・瘀血・痰が多く、柔らかく動くものは気滞に、硬くて固的なものは瘀血によるものが多い。たとえば肝腫大や各所の腫瘍には瘀血が成因となっているものがある。

第5に、癲狂・健忘や麻痺・意識障害などの精神神経症状を伴うことがある。血の寧静作用が失われると、興奮性の精神症状が表れる。血の栄養作用が失われると、知力の低下や知覚の鈍麻などをまねく。

瘀血の病証

瘀血の病証では、上記の主な症候が共通して表れるが、この他に、瘀血の原因となった、あるいは瘀血と合併する気滞・気虚・寒凝・血熱・痰濁などの症候がそれぞれみられることがあり、瘀血の成因あるいは合併する証によって瘀血の証は分類される。

寒凝血瘀証

寒凝による血瘀では、一般的な血瘀の所見がみられるほか、顔色は暗く、唇などにチアノーゼが表れ青紫色を呈し、小腹（下腹部）は冷えて痛み、四肢が冷え寒がるなどの寒象を伴う。痛みは手やカイロなどで温めると和らぐ。レイノー症候を伴うこともある。脈は沈遅細澁など。

治療法は、薬性が温熱の活血化瘀薬を主にした温経祛瘀法を用いる。適応方剤には、桂枝茯苓丸（『金匱要略』）、生化湯（『傳青主女科』）などがある。

瘀熱互結証

血熱による瘀血、あるいは瘀血が長引いて、鬱熱を生じて、熱に偏した瘀血証。血熱によるものは、血熱が血を煮詰めて、粘稠となった血液がスムーズに流れなくなったり、血熱妄動して、脈外に溢れ、瘀血となって血流を阻滞させて生じる。また、打撲傷の内出血（すなわち瘀血の）部位に鬱熱が生じて、熱証を帯びることもよくある。痛みは氷や湿布で冷やすと緩和される。血熱妄動による出血を生じやすく、血尿・血便・歯肉出血などをよく起こす。興奮性の精神症状がみられることがあり、婦人科疾患ではヒステリー状の精神症状を伴うことがある。舌質は暗紅または紫暗で、脈は細数を呈す。

治療法は、活血法と清法、下法を結合した瀉熱逐瘀法を用いる。適応方剤には、桃核承気湯（『傷寒論』）などがある。

気滞血瘀証

気滞を原因とする、あるいは気滞を合併する瘀血証で、瘀血の症候として最も一般にみられる。血瘀の主要な原因は気滞だが、血の停滞はさらに気の鬱滞をまねき、さらに血瘀を助長するという悪循環に陥りやすいので、瘀血の背景には血瘀と気滞が同時に存在することが多い。肝気鬱結をベースとしている場合が多く、精神情緒の変動に症状は影響される。主要症状の痛みの場合、前述した血瘀の痛みと気滞の痛みの性質が混じり合うことになる。月経痛・打撲傷・瘕証・胸痺などの疼痛や月経不順、月経困難、閉経などの婦人科疾患、全身の腫塊などに気滞血瘀証がよくみられる。精神症状は、肝気鬱結による落ち込んだりイライラしやすい、怒りっぽいなどの情緒の不安定として表れる。

治療法は、活血化瘀法に疏肝理気法を加える。適応方剤は、血府逐瘀湯（『医林改錯』）など。

気虚血瘀証

血の運行は、気の推动作用に依拠している。血がめぐるには気の推动のサポートが必要。この気血の関係は、「気は血の帥である」と表現される。瘀血は実証に属すが、気の推动作用の不足によって血瘀が生じ瘀血を産生することがあり、また瘀血が長期化することによって正気が損傷され、二次的に気虚を兼ねることもある。虚実が併存する証候で、本虚標実であることが多い。元来の虚弱体質や病気が長引き気を消耗して生じることが多く、疲れやすい、息切れするなどの気虚証を伴っている。舌質は暗淡、青紫などで、脈は細無力淡など。

治療法は、益気扶正を主として、活血化瘀を加えた扶正祛瘀法を用いる。適応方剤には、補陽還五湯（『医林改錯』）、当帰補血湯（『内外傷弁惑論』）、温経湯（『金匱要略』）などがある。

血瘀の治療 —— 活血化瘀法 ——

瘀血による病証には活血化瘀法を用いる。血の機能を調整する治法を広く理血法というが、活血化瘀法は理血法の一つ。活血化瘀法は、血行を促進して、血瘀の状態を改善し、瘀血を消散する治法。

1) 活血化瘀法の用薬

活血化瘀法は、活血化瘀薬（理血薬とも呼ばれる）を主薬として用いる。活血化瘀薬は、血脈を通利し、血行を促進し、瘀血を消散する作用をもつ薬物で、多くは心・肝経に帰経する。

活血化瘀法は活血により血行を促進することが原則だが、血瘀を引き起こす原因に応じて、原因の解除も同時に行う必要がある。血瘀をもたらす原因は多く、病因病機も単純ではない場合も多いので、病因病機に応じて、活血薬に加えて、気滞があれば理気薬、寒凝による瘀血であれば温裏祛寒薬、血熱によるものならば清熱涼血薬、正気の虚衰があれば補益薬を配合するなどする。また、主な症候

に応じて、たとえば腫塊を消散させるのであれば、軟堅散結薬や化痰薬を合わせ、痹証のような風湿痛であれば祛風湿薬を加えるなどしてそれぞれの対応を行う。

活血薬にも、いろいろな薬性をもつものがあるので、どの活血薬を用いるか、病因病機や症候に応じて、それぞれの特徴を生かした選択を行う。たとえば、寒凝による瘀血であれば、薬性が温の川芎・紅花・乳香・莪朮・鶏血藤・延胡索・五靈脂などを用いる。血熱によるものであれば、丹参・鬱金・益母草・虎杖根などの薬性が寒涼のものを選ぶか、赤芍・牡丹皮などの清熱涼血の作用を併せもつものを用いる。

また、活血の作用の穏やかなものと、比較的峻烈なものがあるので、瘀血の程度によって使い分ける。川芎・没薬・紅花・丹参などは比較的穏やかであり、三稜・莪朮・水蛭・虻虫などは瘀血を消散する力が強く、破血薬と呼ばれる。

また、症候によっても使い分ける。疼痛にたいしては、止痛の効果にすぐれる川芎・鬱金・乳香・没薬・延胡索・五靈脂などを選ぶ。頭痛など身体上部の痛みには川芎を（川芎茶調散）、腰膝痛など下部の痛みには牛膝を（疎経活血湯）よく用いる。鶏血藤は舒筋活絡の作用があるので、痹証の四肢の痛みに応用される。月経不順や月経困難にたいしては、活血調経の作用をもつ桃仁・紅花・益母草・沢蘭・王不留行・丹参などを用いる。沢蘭には利尿消腫の効があり、打撲による腫れにも用いる。外傷や打撲には、この他に乳香・没薬・蘇木・自然銅などが用いられる。

補血薬のエース格である当帰は、補血の作用ばかりでなく、活血の作用にもすぐれる。薬性は甘辛温で、温通経脈・止痛・調経の効にすぐれるため、寒凝による瘀血や、疼痛・月経不調などに幅広く応用される。活血の名薬も兼ねている。

以上のように病因病機に基づいて活血化瘀薬を選択するが、さらに配合によってその効果を高める。

寒凝による血瘀には温経祛瘀法を用いる。活血薬に温経散寒薬を配合する。前述の薬性が温熱の活血薬、川芎・紅花・当帰・鶏血藤などに、温通血脈の桂枝・附子・細辛などを配す。また、肝経に沿った痛みであれば温肝の呉茱萸を、小腹の痛みであれば茴香・烏薬などの温裏の薬を加える。

血熱による瘀熱互結証には瀉熱逐瘀法を用いる。丹参・益母草などの薬性が寒涼な活血薬に黄連・黄芩・梔子などの清熱薬や牡丹皮・赤芍・生地黄・玄参などの清熱涼血薬を配す。さらに大黄・芒硝などの瀉下薬を加えて、大便を通利することによって血分の熱邪を清瀉攻逐することもある。すなわち、活血法と清法・下法を結合した治法を採り、活血と同時に邪熱を蕩滌する。

打撲傷などで頑固な瘀血が留滞しているものは、桃仁・水蛭・虻虫などの作用の強い破血薬も用いる。

気の滞りは、血のめぐりを停滞させやすく、血の停滞はさらに気の鬱滞をまねき、さらに瘀血を助長するという悪循環に陥りやすく、気滞血瘀の症候はよくみられる。気滞血瘀証には、行気活血法を用い、活血薬と理気薬を配合してこれに対処する。桃仁・紅花・当帰・川芎・牡丹皮・赤芍・没薬・乳香・延胡索・丹参・牛膝などに香附子・木香・枳殼・烏薬・柴胡・青皮などの疏肝理気薬を配合する。月経不順・月経困難・閉経や腫塊・打撲傷・瘀血による疼痛など広い応用範囲をもつ。

虚証の瘀血には扶正祛瘀法を用いる。補気・養血・滋陰・温陽などの扶正補虚

の薬物に活血薬を配合する。活血薬に、気血陰陽のいずれの虚かによって、それぞれ益気・養血・滋陰・温陽の作用をもつ補益薬を配合して処方する。

活血薬は、辛温香燥の品が多いので気陰を損傷しないよう注意が必要。また水蛭・虻虫などの破血薬も、作用が峻烈で気を消耗しやすいので、気虚には慎重に用いなければならない。

活血化癥薬は、種類も豊富で、薬効も個性に富むので、やや煩雑になるが、個々の薬物の解説をもう少し進めよう。

セリ科のセンキュウの根茎である川芎は、活血化癥薬の代表格である。川芎は、古くは芎藭と称したが、四川省産のものが良品であることから川芎の名で通用するようになった。当帰と似たセリ科特有の芳香があり、辛温の薬性で肝・胆・心包経に帰経する。辛散の性質で経脈を温通し、活血化癥の作用にすぐれる。主に血分に作用するが、「血中気薬」と称されるように、同時に気分にも働き、活血とともに行気的作用にもすぐれる。気血双方のめぐりを促進するので、気滞血瘀の痛みにはよく効きく。この点は香附子と似ていて、気滞血瘀証にはしばしば一緒に用いられる。ただし香附子は理気薬に分類され、行気が主、活血が従の働きで、川芎はその逆となっている。活血行気止痛が川芎の持ち味。外傷の痛みや月経痛などにも広く応用される。

また辛味は燥湿の効を兼ね、経絡中に侵入した風邪を駆逐する搜風の作用がある。この燥湿搜風の作用のために風湿による痛みに応用され、風湿痺（リウマチなど）の四肢の痛み（独活寄生湯）や風湿頭痛（川芎茶調散）などに配合される。経絡中を軽快に走って作用するので、体の隅々にまで作用が届き、四肢末梢や頭部の痛みによく用いる。

また血鬱を開く作用にすぐれるため、月経閉止や稀発月経などに活血調経の目的で用いる。この時にはしばしば当帰と併せて用いる。

ケシ科のエンゴサクの塊茎、延胡索も止痛の効にすぐれる。薬性は辛苦温、心・肝・脾経に帰経する。『本草綱目』には「血中の気滞も気中の血滞もよくめぐらすので、専ら身体上下の諸痛を治す」と記されている。四肢・関節の痛みばかりでなく、腹痛にも有効（安中散）。川楝子と合わせると金鈴子散となり、腹痛や月経痛に用いる。また、気滞血瘀が長引いて生じた腹部の腫塊を消散させる目的で用いる。

この他、乳香・没薬・三棱・莪朮・鬱金なども活血行気により止痛の効にすぐれている。

バラ科のモモの種子、桃仁の活血化癥作用は強力で、「破血散瘀」と表現される。苦甘平の薬性で、心・脾・大腸経に帰経する。月経閉止を開通したり、しこりのある痛みにも用いられる。下腹部、婦人病など下半身の瘀血の解除に応用される。桂枝茯苓丸・桃核承気湯で重要な役割を担っている。

化膿性疾患のあるタイプは、熱毒が気血を凝滞させて生じると考える。肺癰（肺化膿症）の千金葶苈湯、腸癰（虫垂炎）の大黃牡丹皮湯などにも桃仁が配合され、瘀血のからむ化膿性疾患では、しばしば桃仁の出番となる。

モモのタネである桃仁は、油脂が含まれるので潤腸通便の働きがある。アンズのタネの杏仁と似た効用。腸燥便秘に用いる潤腸湯・五仁丸には桃仁と杏仁が配合され、大便を柔らかくして排出しやすくする。

キク科のペニバナの花弁、紅花は桃仁と相性がよく、しばしば一緒に配合され

る（桃紅四物湯など）。薬性は辛温で、心・肝に帰経する。漢代に西域からもたらされた薬物で、『金匱要略』婦人雑病門の紅藍花酒にも登場するが、後世になってポピュラーな活血化癥薬となった。顔料のベニ（江戸時代以来の山形の最上ベニ）やベニバナオイルの原料にもなるが、活血化癥薬としての守備範囲も広く、少量（3～6g）では穏やかな活血養血作用、多めに用いると強力な破血散癥の作用を発揮する。婦人科疾患の瘀血証に多用される。また、瘀血を取り除き、血の新生を促す祛瘀生新血の働きもある。田七に似た効能で、出血後の瘀血証に用いる。ただし出血中であれば、少な目に用いないと出血を助長する恐れがある。

シソ科のタンジンの根、丹参にもすぐれた活血作用があるが、丹参の利点は苦微寒の薬性に負っている。活血化癥薬の多くが、辛温の薬性なので、熱証の瘀血証には使いにくい面がある。丹参の薬性は、熱を助長することがないので、熱証にも応用できる。活血止痛の働きにすぐれるが、胸部や胃の痛みにも有効。近代中国の創製方である冠心二号方の主薬で、胸痹（虚血生心疾患）に用いられる。丹参飲は胃潰瘍などの上腹部痛に効果がある。

丹参にも紅花と同様に、瘀血を取り除き、血の新生を促す祛瘀生新血の働きがある。血を新生することから、「一味の丹参の効は、四物湯に匹敵する」といわれ、丹参は「一味四物湯」とも呼ばれる。

微寒の薬性から涼血除煩安神の働きがあり、心熱による煩躁や不眠にも用いる（清宮湯）。

シソ科のメハジキの全草を乾燥した益母草も、辛苦微寒の薬性で、婦人の瘀血を伴う血熱証に使える。乳癰（乳腺炎）などにも用いる。益母草は、活血調経の効果にすぐれ、瘀血による婦人の月経失調に広く使われる。産前産後の諸症候に用いられるのが、その薬名の由来。丹参と同様、祛瘀生新血の働きもある。また、利尿作用があり、むくみを治す。

2) 活血化癥法の主要な方剤

温経祛瘀の桂枝茯苓丸と生化湯、瘀熱互結証に用いる桃核承気湯、気滯血瘀証に幅広く応用できる血府逐瘀湯、中風後遺症の気虚血瘀証に用いる補陽還五湯を解説する。

桂枝茯苓丸（『金匱要略』）

【組成】 桂枝・茯苓・牡丹皮・桃仁・芍薬

【効能】 活血化癥・消散癥塊

【主治】 瘀血留結胞宮証

温経祛瘀法の代表方剤。原典では婦人の小腹の宿塊（長期にわたって形成された腫瘤）に用いるものだが、月経不調・不正出血・産後の不調、腹痛、腹部の腫瘤など、広く腹部から下腹部の瘀血に用いられる。

その組成は、辛温の桂枝により血脈を温通させる。本方の主薬。桃仁・牡丹皮は活血化癥により腫塊を消散させ、芍薬は舒筋により腹部の痙攣痛を止める。血の停滞とともに津液も停滞して腹部に留滞する寒湿を、茯苓の淡滲利湿作用により逐う。桂枝の温通血脈が主なので、ふつう寒凝瘀血に用いるが、清熱涼血の牡丹皮が配され、寒熱併用の組成となっていて、応用範囲も幅広くなっている。

生化湯（『傳青主女科』）

【組成】 全当帰・川芎・桃仁・炮姜・炙甘草

【効能】 活血化瘀・温経止痛

【主治】 寒凝瘀血証

産後などの血虚に、寒邪が乗じて侵入し、寒凝血瘀を引き起こし、胞宮（子宮）に阻滯するものに用いる。産後の悪露が下りないもの、下腹部の冷えて痛むものなどに応用される。

温経散寒・養血化瘀により、瘀血を消除して血の新生（生化）を促すので生化湯と命名された。

方中の当帰は用量を多く用い（15g 前後）、養血活血し瘀血を除き血の新生を促し本方の主薬。全当帰とは養血の働きにすぐれる当帰身と活血の作用も兼ねる当帰尾の両方を用いるということ。「血中気薬」の川芎は、血とともに気もめぐらす。桃仁は活血して瘀血を消散。炮姜は、血分に入り散寒し、温経止痛の働きがある。炙甘草は諸薬を調和。原典では黄酒と童便を加えて薬力を高めている。

桃核承気湯（『傷寒論』）

【組成】 桃仁・桂枝・大黄・芒硝・炙甘草

【効能】 瀉熱逐瘀

【主治】 瘀熱互結証

『傷寒論』の原典では熱結膀胱証に用い、少腹が急結し、排尿に障害はなく（小便自利）、譫語煩渴して、「狂」のようになる証を治す。少腹は左右の側腹下部で、肝経の循行する部位。したがって肝経の病変を表している。小便自利により、水湿の病ではなく血分の病であることを指している。狂は瘀熱が心神をかき乱していることを示している。

本方は、調胃承気湯に桃仁と桂枝を加えた組成で、桃仁は破血化瘀、大黄は下瘀泄熱の効があり、合わせて瘀血と熱を消除する。二薬とも君薬。桂枝は血脈を通行して桃仁を補助。温通経脈の桂枝には反佐の意味もあり、散血の効を高めている。芒硝は瀉熱軟堅で大黄を補助。炙甘草は益気和中するとともに、他薬の比較的峻烈な薬性を緩和して、正気の消耗を防いでいる。下法と活血法を結合させて破血下瘀泄熱の効能をもつ方剤で、下焦の蓄血証ばかりでなく、頭痛・目の炎症・歯の出血と痛み・鼻出血、外傷・打撲後の発熱や局部の熱、熱証の月経の異常などに応用される。

下法と活血法の結合といえば、張仲景方では大黄牡丹皮湯もある。腸癰（虫垂炎）に用いる方剤。

張仲景はその著『傷寒論』および『金匱要略』で、瘀血の弁証論治を具体的に提示して、11 方の活血の剤を収録している。桃核承気湯・抵当湯・抵当丸・桂枝茯苓丸・温経湯などで、これらは活血化瘀の名方剤として、現在も用いられている。活血化瘀法の基礎は仲景によって築かれたといえる。

血府逐瘀湯（『医林改錯』）

【組成】 桃仁・紅花・当帰・生地黄・川芎・赤芍・柴胡・枳殻・桔梗・牛膝・甘草

【効能】 活血化瘀・行気止痛

【主治】 気滯血瘀証

『医林改錯』を出典とする清代の比較的新しい方剤で、日本では馴染みが薄かったが、処方バランスがよく効果も高いことから、80年代からよく使われる処方になった。

活血化瘀・行気止痛の効能を備え、気滯を伴う血瘀証に広く用いられる。王清任の原典では「胸中血府血瘀」の引き起こす諸証に用いられているが、胸中ばかりでなく腹部の瘀血などにも応用できる。血瘀による胸痛・腹痛・動悸・不眠などを治す。

本方の組成は、桃紅四物湯と四逆散の合方に桔梗と牛膝を加えたもの。方中の桃仁・紅花・赤芍・川芎・牛膝は活血により血分の瘀滯を疏通。当帰は活血とともに養血し、生地黄と赤芍は血分の熱を清解。柴胡・枳殻は疏肝理気で、気滯を除く。桔梗は肺気を開き、降気の枳殻と合わせて胸中の気機を宣暢。また、牛膝は胸中に鬱滯する血を下行させる。桔梗・柴胡の昇の作用と牛膝・枳殻の降の作用で、昇降のバランスをとり気血を上下にめぐらせてその滯りを消散させる。

補陽還五湯（『医林改錯』）

【組成】 黄耆・当帰尾・赤芍・川芎・桃仁・紅花・地竜

【効能】 補気活血・通絡通陽

【主治】 気虚血瘀・中風後遺症

気虚血瘀証に用いる補気活血の方剤には、やはり『医林改錯』を出典とする補陽還五湯がある。中風後遺症の専剤として中国では使用頻度の高い方剤である。

中風の後、瘀血が脈絡を阻滯するため脈絡が通利せず、気血の運行が阻害されて、半身の気はめぐらず血は栄養することができなくなって生ずる半身不随・口眼歪斜・構音障害・膀胱障害などに用いる。正気が虚衰し、瘀血が脈絡を阻塞し、麻痺の部位は、気虚血滯の状態となっている。このような状態にたいして、治法は補気を主として、補助的に活血通絡を加える。補法と活血法を結合させた扶正祛瘀法の一つ。

本方の主薬の黄耆は、30～120gと大量に用い、脾胃の元気を振り起こし、気を盛んにして血の流行を促す。他の薬はみな、3～9gの少量を用いる。それらはすべて活血の働きがあるが、当帰は養血の効もあり、黄耆と合わせて気血を補っている。地竜（動物生薬ミミズ）は、ミミズが土中を走行するように、塞がった経脈を掘り進むイメージの通経活絡の作用にすぐれる。合わせて元気を旺盛にして、血のめぐりを回復して、麻痺などの機能障害を改善する配合となっている。

血府逐瘀湯と補陽還五湯の創製者、清代の王清任は『医林改錯』を著し、活血法に新機軸を打ち出した。この書には清任の創製した22方の理血剤が収録されているが、気と血の流動が密接に関連していることから、彼の方剤はほとんどが気の調整と活血を結合したもので、理気活血の剤と補気活血の剤に大別できる。前者の代表方剤が血府逐瘀湯で、後者の代表方剤が補陽還五湯である。

王清任の功績は大きく、彼の後清末の唐容川は『血証論』を著し、主として出血性疾患の血の病証を詳しく分析し、活血法の応用を広げた。これらの成果は、周学海・張錫純らによってさらに発展をみて、現代では活血化癥法が広い領域の疾患に応用されるようになってきている。

(つづく)

プロフィール

平馬直樹 (ひらま・なおき)



●現職

平馬医院院長，日本医科大学東洋医学科講師

●略歴

1978年 東京医科大学卒業

同 年 北里研究所附属東洋医学総合研究所医局 入局

1987年 中国中医研究院广安門医院 留学

1990年 牧田総合病院牧田中医クリニック診療部長

1996年 平馬医院副院長，後藤学園入新井クリニック漢方診療部長を兼任
現在，平馬医院院長。2005年より日本医科大学東洋医学科講師

●著書

『図解よくわかる東洋医学』共著（池田書店・2005年）

『中医学の基礎』監修（東洋学術出版社・1995年）